

疾走・逆転サヨナラ

志村 良知

ワールド・ベースボール・クラシック準決勝メキシコ戦。一点差九回裏無死一・二塁。二塁走者は二塁打の大谷翔平、一塁走者は四球の吉田の代走周東佑京。ともに米大リーグ、日本プロ野球を代表する俊足選手である。

五番村神様（村上宗隆）が三球目を打った打球は右中間の大飛球。外野手に捕球さえされなければ絶対に生還できる大谷は二・三塁間に留まって打球の行方を見極めようとする。

一方、打球の行方と追う右翼手が良く見える一塁走者という立ち位置にいた周東は本来外野手。打球と右翼手の走り方から捕られないと判断、即座に全速で走り出す。

大谷が、打球はフェンス直撃と判断し全力疾走に移った時、周東は二塁を回って大谷の後ろ十五メートル位に迫っていた。大谷も速い、大柄で大きなストライドなのであまり速く見えないが、周東との間は縮まらない。二人の日米野球を代表する快速ランナーの本塁への激走は圧巻だった。

対するメキシコの守備。フェンスに当たったボールを処理した右翼手は絶妙の位置に中継に入った遊撃手に素早く送球、遊撃手は振り返りざま本来なら長駆一塁からの走者を仕留めるに最適の地点、本塁から数メートル手前にレーザービーム・バックホーム。かたや、周東の走塁を見ていた捕手は、もしアウトにできる可能性があるとしたらぎりぎり本塁上と判断して本塁の後方。遊撃手のバックアップに入った二塁手も、周東が見えるので遊撃手が本塁に向けて投げるのに邪魔にならないよう身を沈める。

そしてファイナーレ。周東は遊撃手の予測よりはるかに早く狙いの点を通過、ボールがバウンドするのを後目に華麗なスライディング。逆転サヨナラ。先に生還した大谷がスライディングの指示を出すまでもない早さだった。殊勲の周東は両手でヘルメット放り投げ、歓喜の選手の輪に飲み込まれた。ボールは日本選手の間を空しく三塁側ベンチ方向へ。周東が生還したとき二塁を回っていた村上も、栗山監督と共に輪の中心へ。